

# 助成年度：平成 14 年度

[所属] 静岡大学 教育学部

[役職] 助教授

[氏名] 延原 尊美

[課題]

## 駿河湾における最近 25 年間の貝類相の変遷

－温暖化と沿岸環境保全の指標として－

[内容]

駿河湾は、地球温暖化や沿岸開発などが海洋生物相に与える影響を評価する上で監視モデルとなる中緯度海域といえる。本研究では、故寺田徹氏が 1975 年～2000 年にわたって駿河湾内で採集した貝類資料をもとに、過去 25 年間に於ける湾内の海生貝類相の時間変化を調査した。その結果、(1) 19 種の分布北上種が認められた。とくに駿河湾西側の沿岸水支配域においても分布北上種の越冬個体群の存在が示唆され、これらの種群は大気温暖化と海洋気候との相互関係を今後監視する上で注目される。(2) 駿河湾とその海況が類似している相模湾とで絶滅危惧種の比較を試みた結果、相模湾での絶滅危惧種のうち、潮下帯～水深 20m 付近の砂底もしくは砂泥底に生息する種については健全個体群が駿河湾側で存在している可能性が示唆された。今後、双方の海域での環境変化を比較することで、浅海性貝類の消滅原因をより特定できるものと思われる。(3) 将来の駿河湾内の貝類相の変化を予測する上で、温暖化した場合の比較事例として宮古島および沖縄本島にて、駿河湾内での沿岸環境の変貌をとらえる事例として沼津・牛臥海岸にて貝類相調査を行った。温暖化が進行したとしても、サンゴ礁生態系や干潟、砂浜海岸に生息場をもつ貝類の北上は、駿河湾では急流河川の存在や護岸等の沿岸環境の変貌から考えにくいとされた。一方で、潮間帯～浅海の岩礫底もしくは浅海砂底に生息域をもつ種群と、人工的な護岸にも固着・付着できる種群については北上が予想される。これらの生息場は、漁業資源としての有用種の交代や外来移入種の問題等の観点から今後、監視対象として注目される。